

2024年2月29日

## 2024年1月（令和5年度第2回）実施の タンチョウ越冬分布調査結果について 正富宏之

### はじめに

2024年1月24日を基準日として、北海道内で目撃されたタンチョウの位置、幼鳥・成鳥（亜成鳥を含む）別羽数、所在地の環境などが記録された。また、羽数の確実な把握のため、鶴居村では大規模給餌場での午前及び午後の観察記録を参照したほか、少数個体が広く分布している地域では、重複記録に配慮しながら複数日の調査を行ったところもある。

なお、このコメントでは、飼育下の個体は対象外とし、年度内の第1回調査を「12月調査」、第2回調査を「1月調査」と記したほか、行政区を示す際に振興局の表記を省略してある。また、本文のカッコ内数値は前年の1月調査の記録を比較のために示してある。

### 1. 記録羽数とその特徴

#### 1-1. 羽数と増減割合

羽数：記録羽数は成鳥1,168羽、幼鳥148羽、成・幼鳥不明13羽の計1,329羽で、今年度12月調査（2023年12月5日実施）より成鳥で250羽増、幼鳥33羽増、不明3羽減で、合計では280羽多かった。また、前年の1月調査と比べると、成鳥で5羽減、幼鳥18羽増、不明11羽増となり、合計で24羽多かったことになる。

増減割合：今回の記録羽数を12月調査のそれと比べると、成鳥・幼鳥とも1.3倍を示し、不明鳥の割合は低下して、合計も1.3倍ほどで、前年と同様に増加傾向を示した。また、前年1月調査の羽数と比べると、成鳥はほぼ同数なのに対し、幼鳥は13.8ポイントの増加を示し、記録総数では1.8ポイントの増加にとどまっている。

#### 1-2. 各給餌場の飛来数

いわゆる五大給餌場（阿寒・下雪裡・中雪裡は環境省管理、音別・中茶安別は道の管理）では、下雪裡給餌場（通称鶴見台、以下給餌場を省略）での羽数が326(204)羽で最も多く、次いで中雪裡（通称サンク）200(144)羽、中茶安別105(141)羽、阿寒66(74)羽、音別52(160)羽の順となる。ただ、前年2位の音別が今年是最少となっているが、調査時に1.5kmほど離れたところに群れがあり、地域全体としては前年に近い生息数が記録されている。また、五大給餌場で記録された合計羽数の中で、下雪裡の個体数割合が43.5%を占め、前年の28.2%を大きく上回ったのが注目されるし、特に鶴居村における記録数が2019年以降600~700羽ほどを維持しているのは、課題であるタンチョウの集中解消の面から、注目しておくべきである。

#### 1-3. 個体数について

記録羽数は、前年よりも24羽多いものの、過去最多を示した2022年1月調査より160羽も少ない。今年の記録数を主要な越冬地である十勝、釧路、根室の3管内でみると、十勝では、これまでの最多記録である2018年度の91羽を3羽超えて記録を更新し、根室でも過去最多の前年数47羽を一挙に20羽を超える大幅な増加を示したのに対し、釧路では13羽とわずかに減少している。他方、五大給餌場と別のところに分散して暮らす個体は、前年とほぼ同じ580(582)羽である。

さらに、北海道に生息するタンチョウ個体数は近年1,800羽前後と推測され、今回の結果とは約500羽の差がある。このうち、十勝では今回記録数の2倍ほどの生息が見込まれるし、残りは根室での若干の見落としのほか、釧路における記録もれの可能性が高いと思われる。

### 2. 分布状況

#### 2-1. 分布管内数

今回タンチョウの生息が記録されたのは日高、十勝、釧路、根室の4管内で、12月調査より3管内少なく、記録管内数・減少数とも前年と同じである。ただ、今回調査時は目撃できなかったが、上記以外の2管内でも調査時点で生息が別途確実視されているため、実質今冬も6管内で生息していたとみなして良いであろう。

## 2-2. 各管内への集中度

各管内で目撃した羽数の割合は、多い順に釧路が全体の87.2(89.8)%、十勝7.1(6.3)%、根室5.0(3.6)%、日高0.7(0.3)%となる(図1-2参照)。前年に比べて釧路で2.6(3.0)ポイント減少したが、他管内はいずれも増加し、釧路への集中が前年に引き続き全体の90%を割って減少を示した。さらに、最近5(2018-2022)年間の釧路における割合は平均92.6%を示しているから、一見釧路から他管内への分散が進行しているかのように見える。しかし、釧路管内以外での繁殖増加や調査精度の向上による記録個体数の増加なども考慮すると、相対的な割合は低下しても、実数は高水準を保つと推測される。つまり、近年のタンチョウ推定総羽数からみて、釧路管内における多数のカウント漏れを考慮すれば、依然として釧路管内への集中(80%以上)が続いているとみてよい。

## 2-3. 市町村別の分布

今回の調査でタンチョウが確認されたのは、2(2)市14(10)町1(1)村の計17(13)自治体で、12月調査に比べると1(2)市8(11)町少なく、新規にタンチョウが記録された自治体も見当たらない。また、前年1月調査よりは4町多いが、2019-2023年の5年間の1月記録では13-18自治体数を示しており、経年的にも増加傾向は認められない。

自治体の中で最多羽数を記録したのは鶴居村で、前年1月調査より104羽多い683(579)羽を数え、釧路管内の58.9(49.4)%を占め、今回の記録総羽数の中でも半数を超す51.4(44.4)%を示している。2位は前年同様に釧路市(音別町や阿寒町を含む)であるが、目撃数は前年同期より70羽少ない256(326)羽(管内の22.1(27.8)%、記録総羽数の19.3(25.0)%)で、管内でもまた総数でも前年より5ポイントほどの低さを示した。なお、羽数の多い記録の3位は釧路管内標茶町の145(181)羽で、ここまでの上位3自治体の合計は総数の81.6(83.2)%を占め、前年より1.6(3.6)ポイント低い。さらに、記録数の4位は釧路管内浜中町66(82)羽、5位は根室管内中標津町の31(18)羽などで、4位までの順位は前年と変わらないが、5位は26羽の大樹町に代わり前年8位の中標津町となっている。

## 2-4. 利用環境

調査時における個体のいた環境は、畑・牧草地が前年よりやや多いものの、バドックや農家敷地にいた割合はほぼ同程度である(図2参照)。しかし、前年は河川・湿地にいたのが全体の10%なのに、今年はわずか4%に過ぎず、これに対し農家・農地の堆肥にいたのが昨年は7%で、今年は16%を示している。この違いは、調査時の天候・気温・環境の状態といった年特有の状況変化があり、それにより利用割合が変動するのは、むしろ通常と言える。ただ、「給餌なしの観察場所における土地利用状況別の分布」(図3-2参照)でも示されているように、採餌場として相変わらず堆肥が選択されている点は、給餌・分散・鳥フル・農業形態等々とのかわりで問題視しておく必要がある。

なお、「給餌の有無別分布」(図3-1参照)と「50m以内の農家の有無別の分布」(図4参照)は前年とほぼ同じで、変化は認められない。

## 3. 繁殖状況

記録された幼鳥数は148(130)羽で、12月調査より33(32)羽増え、前年1月調査より18(40)羽多い。今回の記録総数には成鳥と幼鳥の区別がつかない13(2)羽を含むため、これを除いた1,316(1,303)羽の中の幼鳥割合は11.2(10.0)%を示し、12月調査で示されたと同様に11%台を保っていることから、繁殖は良好であったとみて差し支えない。

## 4. 総括と提言

今年度は高病原性鳥インフルエンザによるタンチョウの死亡が複数例確認され、従来から懸念されていた集団感染と個体群減少への恐れが現実のものとなりつつある。その基本的対抗策とも言うべき地域個体群の分散・分離は、冬期主に集団生活を行う現在のタンチョウにとり緊急の課題である。その課題解決のために、現在のタンチョウ生活環境の把握と分布状況、並びに個体数のより正確な把握が、まず求められる。

今回の調査では、特に少数個体が広域的に分布して、その検出に多大の時間と技術を要する根室地域において、調査日の複数化を採用する手法で、従来見落とされていた記録の発掘が行われたことは極めて意義深い。1月調査の際の課題指摘と共に、より正確な生息環境の現状把握や分布と個体数の関係が提示されており、関与された方々に衷心より敬意を表したい。

また、今年の繁殖状態を示す幼鳥割合が、前年に続き高い水準を保つことが示されたのは喜ばしい。しかしながら、越冬期に依然として釧路管内の一部に高密度に分布する状況は変わらず、また羽数把握の点からも、全体的に見て今回も十分な成果を挙げたと言えないのが実情である。実態のある程度の精度で捉える調査でなければ、現在置かれているタンチョウの個体群動態を理解出来ず、保護対策も効果的な形で実施できない点を深く考慮し、より有効な保全対策を実行するためにも、可能な限り実態に即した結果を得るようにしなければならない。

その改善のためには、まず広域的な調査のための経費増が必要であり、また調査者の限定を補うため、一般人の人々によるスマートフォンを利用した調査参加や、調査に先立つ事前情報の提供など、技術的にも調査方法改良の余地がある。従って、今後実施可能な善策の制定へ向けた努力がなされるべきであろう。